

北海道

国際理解教育  
研究協議会

会報

第 30 号

会 長 大泉 弘  
事務局 長 石田省子  
発行 1994年10月25日

## 全国国際理解教育研究大会(新潟)に参加して

北海道国際理解教育研究協議会

札幌支部事務局長

大竹伸一(札幌市明園中学校)

世界に広がる日本海と信濃川が会おう街・新潟で開催された、第21回全国国際理解教育研究大会で研究発表する機会をいただいた事に感謝申し上げます。

私が参加させていただいた第四分科会(地域社会における国際理解のための活動)は、とくに今回の大会において力点がおかれておりました。これは、新潟県が県の政策として設定した、地域社会における国際交流の具体化を反映されたものです。今回の分科会においても、国際理解教育を話題の中心に据えながら、国際結婚の問題、村おこし・町おこしにかかわる国際交流活動の問題など地域社会に視点をおいた討議が展開されました。

私の発表は「S. E. S. E. の会」の

活動の一環として行った「JAPAN PROJECT' 93」についての報告でした。

- ・この事業は、会が札幌市教育委員会の同意のもとにアメリカ・アーカンソー州リトルロック市へ札幌市の教員(幼稚園・小学校・中学校・高等学校・特殊学校)22名を2週間に渡って派遣したものであること。(期間は1993年10月3日～17日)
- ・この事業の目的は、人類が異文化に触れることにより新たな「創造」を生んだように教師自らが異文化に入り込み、そのカルチャーショックから日本の学校教育の中に発想の転換による「創造」を生み出すことであること。

この報告は、民間が主体となり、父母自らが学校教育現場に積極的に係わりをもちながら国際理解教育の推進役として活動している例として、大会参加者の注目を得ました。国際理解教育を推進して行くためには、教育現場ばかりでなく、家庭をふくむ地域社会との連携の必要性を強くアピールしたものといたします。

この分科会では、地域社会を視点においたものですから、実際の生活に根差したいろいろな問題点が話し合われました。農村における国際結婚家庭の子弟の学校教育における様々な問題点、環日本海交流の拠点都市新潟における具体的な国際理解教育の実践上の問題点などどの話題など地域社会を強く意識したものになりました。

この大会に参加して、全国の実践に接することにより、国際理解教育における地域社会との係わりの重要性を強く意識するとともに、その課題を認識することができました。

## 国際ジュニア・アート・キャンプに参加して

札幌市立八軒西小学校 池田幸一

国際ジュニア・アート・キャンプは、キャンプ・アートスクール・ホームステイなどのさまざまなプログラムを通してお互いの理解と友情を深め、21世紀をになう子どもたちに豊かな創造性と国際性、正しい国際意識を身につけてもらうことを目的に、北海道新聞が主催して1987年から行なわれている。今年、第8回目である。8月3日から7日までの5日間、札幌・トマムを会場にしてプログラムが組まれた。今年、海外8カ国（カナダ・中国・韓国・ニュージーランド・シンガポール・ドイツ・アメリカ・タイ）の中学生67名、付き添い教員17名が参加した。

今年度、初めて本会に北海道新聞社より協力の依頼があった。協力依頼の内容は、8月4日札幌市の「芸術の森」を会場としたステージパフォーマンスの中で行なうゲームの指導である。このような指導に関する担当部署がないため、とりあえず今年度は庶務部が担当することになり、私が計画・指導をすることになった。

主催側の担当者との打ち合せや会場の下見などから、当日のプログラムは表の通りとなった。私が担当したのは、ゲームタイム・質問コーナー・全員でパフォーマンスの部分である。

- |      |                   |
|------|-------------------|
| 1.日時 | 8月4日(木)           |
|      | 15時～16時30分        |
| 2.場所 | 芸術の森:野外テント        |
| 3.予定 | 15:00 開演・主催者挨拶    |
|      | 15:10 ステージパフォーマンス |
|      | 15:45 ゲームタイム      |
|      | 国〇×ゲーム            |
|      | 16:10 質問コーナー      |
|      | 16:25 全員でパフォーマンス  |
|      | ロック民謡:親子ソーラン      |
|      | 16:40 終了          |

ステージ・パフォーマンスは、5分間の中で自分たちをアピールするプログラムである。タイの子どもたちは民族衣装を着て指を微妙に動かしバンブーダンスを踊り、韓国の子どもたちはソウルオリンピックの集団演技で披露した太鼓の踊りをみせてくれた。中国は代表の子が、いま中国で一番流行っている歌をステージでまじと踊りながら歌い、みんなからやんやの喝采を受けていた。めまぐるしく変わりつつある中国の雰囲気を感じた。

ゲームタイムは、参加国に関するクイズに答える〇×ゲームである。問題は私が考え主催者と事前に検討して決めたものである。子どもたちは、クイズの問題になった国の子どもたちの様子をみながら問題に答え、正解のときにはガッツポーズをしたり歓

声をあげたりしてゲームを楽しんでいた。質問コーナーは、各国の代表の子どもたちが会場の子どもたちから質問を受け、それに答える内容である。会場に日本人の子どもが少なかったため、主催者は来年はなんとかしたいといていた。

最後は、ロック民謡:親子ソーランを全員で踊った。子どもたちは踊りをすぐ覚え、ロックの軽快なリズムにのって体を動かしていた。表情豊かに踊りを楽しむ様子は、まわりで見ている人を浮き浮きさせる。日本の中学生は、シラケてこのようには踊らないだろうと参観の人が話していた。

外国の子どもたちのゲーム指導は初めて経験したが、反応がよく楽しんで指導ができた。

## 第10回札幌国際理解教育研究会に参加して

北海道国際理解教育研究協議会

広報部副部長 中村 淳(札幌市真駒内緑小学校)

「国際社会に生きる日本人の育成」を研究主題にして、8月27日(土)、札幌市二条小学校において、第10回札幌国際理解教育研究会が実施された。

第10回をむかえた研究会は、近年の国際理解教育の重要性の認識の高まりから百人を超える多数の参加者があった。授業もその後実施された研究討議においても熱気にみちた素晴らしい意見の交流があった。とくに初めて研究会に参加したという参加者から多くの実践に基づいた悩みが数多く話し合われたのも特筆すべき事であった。

これは、今回の授業者フレッシュマン宮本先生が素晴らしい授業を提供してくれたことや、S. E. S. E. 会など教員だけではなく地域の活動との連携など積極的に民間団体との連携を図った事などが考えられる。今回の研究会においてなされた様々な試みは、研究ばかりでなく、これからの会の運営についても大きな示唆を与えてくれたものとする。

それでは、手短かに研究の内容について紹介したい。

### I 研究主題

「国際社会に生きる日本人の育成」

### II 研究主題設定にあたって

国際社会とは、国家や民族を基本的な単位とし、相互に尊敬しあい、協力して平和に共存・反映していける全世界的な社会である。このような世界を作るために必要な日本における国際理解教育の目的は、言うまでもなく「世界の中の日本人として国際的に信頼される人を育てる。」ことであろう。

そのためには、各学校段階における全教育活動で「相手や相手の国を思いやることのできる豊かなこころを持ち、世界の人々と手を携え、未来をたくましく切り開くことのできる国際性豊かな日本人」を育成していくことが重要な課題であると考え、研究主題「国際社会に生きる日本人の育成をめざして」を設定した。

### III 第10回大会でめざすもの

第9回大会においては、「身近で、誰とでも、いつでも、どこでも」取り組める地域に根差した国際理解教育をどうすすめていくとよいかということを課題として取り組んだ。昨年は、地域にある北海道朝鮮中高級学校との交流や、音楽「世界のこどもの歌」のなかでイギリスに滞在していた方の話を聞く中で“地域に根差した国際理解教育”という課題で取り組み成果をあげた。

そこで、今年の大大会においては、次の点について明らかにしていきたいと考える。

#### ① 国際理解教育の素地指導はどうあるべきか。

国際理解の精神的基盤としては、小さいころから他者への関心と思いやり、自分と異なるものの受容と尊重、問題解決のために他者と協力しあえる態度

の育成が大切である。

では、実際の授業での、国際理解教育の素地指導どうすればよいだろうか。

② 国際理解教育カリキュラムについて

本大会において検討をくわえるとともに、今後も加除訂正していく中でカリキュラムを充実させていきたい。

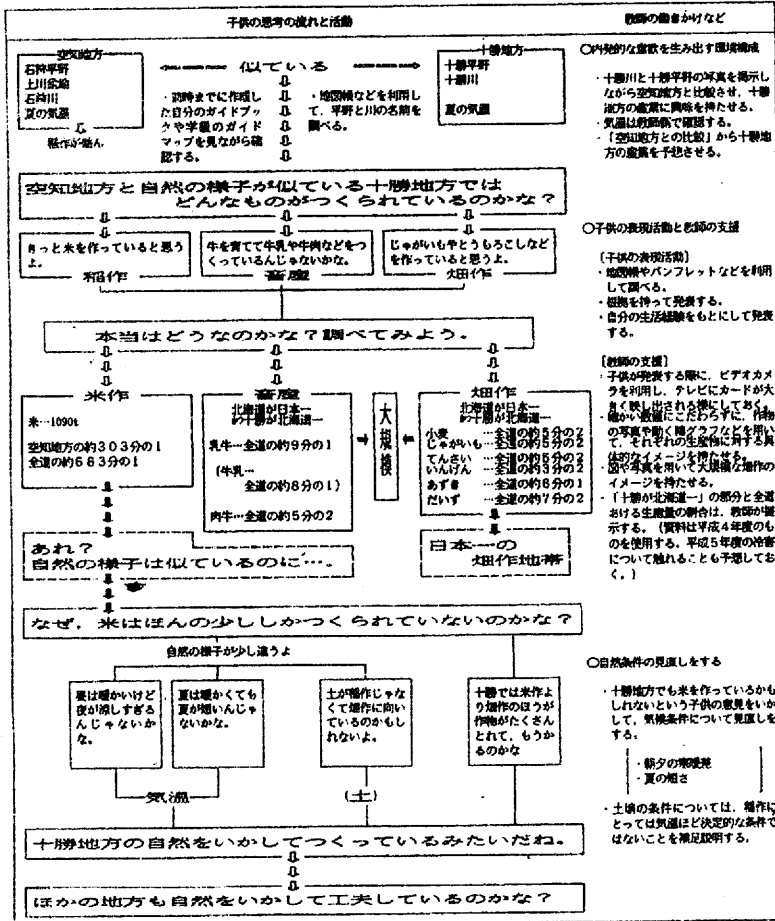
IV 授業について

|     |         |                  |
|-----|---------|------------------|
| 4年  | 社会科     | 《わたしたちの北海道》      |
| 指導者 | 宮本 由美教諭 |                  |
| 児童  | 4年1組    | 男子22名 女子13名 計35名 |

① 授業でのねらい

自分達の北海道について、より広くより深く「もっと知りたい」「伝えたい」という思いをひろげていくために、単元を通して「北海道ガイドマップ」づくりを取り入れている。この子供達の思いを広げ、自分から外の世界へ働きかけていこうとする力を育てることが、市・都道府県・国・世界の国々・・・と相手意識につながる

対象をひろげていくことになり、そのことが国際理解につながっていくことと考えている。本時では、自分達の住む北海道各地の特色ある産業・気候・暮らしについて調べて行く活動の中から、それぞれそのよさに気付かせたい。さらに学級の友達の調べたことをよく聞き、それらについて比較したり考えたりして自分なりに判断する力を育てたいと考えている。



# 国際理解教育に関する実践報告

手稲中学校 高見 知佳子

## 1. 国際理解教育と英語教育

社会の急速な発展に伴って、国際化・情報化という言葉が世の中にあふれている。確かに我々の日常生活の中かなりの割合でコンピューターが入り込んできたし、街を歩いても外国人が多くなってきているのを実感することができる。その影響で、学校教育それも特に英語教育の中の「国際理解教育」や「異文化理解教育」によせる期待度や必要性もかなり高まってきているように思える。

ひと昔前の中学校ならば、「英語という言語を教えること」が国際教育であり、英語という「言葉」の使い方を教えることで満足とされていた。いわゆる4技能のうちでは「書くこと」「読むこと」に重点が置かれていたため、10年間英語を勉強していながら、難しいシェークスピアを読むことはできても、簡単な英会話はまったくできないという奇妙な生徒が続出していた。つまり、英語に関する「言語の知識」はあっても、その英語を通して「外国のことを理解する」というところまではいかなかった。それが今までの英語教育であったのではないだろうか。

しかし、平成5年度からの中学校における新学習指導要領の完全実施に伴い、かなりの変革を要求されている。英語教育の重点目標になっているのは下記の通りである。

- (1) 外国語を理解し、外国語で表現する基礎的な能力を養う
- (2) 積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる
- (3) 外国及びわが国の言語や文化に対する関心を深め、国際理解の基礎を培う

さらに特に留意すべき具体的事項として、「聞くこと」「話すこと」の独立化がなされ、文系・文法事項の指導よりも、音声指導を重視する傾向にある。つまり、耳と口を使ってのコミュニケーションの場を多く設定することが望ましいとされる。今までの「知識を詰め込む授業」から「知識を使いこなす授業」への方向転換を要求されたのである。

## 2. コミュニケーション能力と国際理解

上で述べたように、最近の英語の授業で最も要求されるものは「コミュニケーション活動」である。コミュニケーション活動とは基本的に、英語を使って話し手と聞き手が相互に理解し合う「相互理解活動」である。今までの英語教育のように、文型・文法指導に重きを置いたものではなく、実際に英語を使う場面を作り出すことによって、英語を理解しようとすることを目的とする。そのコミュニケーション活動を図ろうとする態度を育成することが、新指導要領のひとつ重要なポイントになっている。

ところが、実際に授業の中でコミュニケーションの場を作ろうとすると、大きな壁につき当たってしまう。それは、生徒たちが「コミュニケーションをしようとしなさい」という壁である。例えば、授業の最初に英語であいさつをしようとする。確かに決まり切った『Good morning. How are you?』というものや、わかりきった曜日や月日などであるが、生徒は言葉を発しようとしなさい。最初はその英語の発音やつづりがわからなかったり、自信がなかったりするからだろうと思っていたが、どうやら違うようだ。例えば、そのような生徒たちに単語テストと称して、英語を書かせたりするとちゃんと書けるのである。そこで、生徒たちに朝起きてから学校に来るまで「おはよう」というあいさつをどうか聞いたところ、半分の生徒はしてこないという。これは極端な例ではあるが、日本語ですらあいさつをしない生徒に、英語であいさつをさせようとするのは大変なことである。コミュニケーションをしようとする態度を育成するためには、まず日本語でのコミュニケーションの場を多くしないとだめだということがわかってきた。

コミュニケーションを図ろうとするために、いちばん重要なことはいかに「恥ずかしさ」を克服するかということである。海外に旅行に行って、きちんとした英語がわからなくても、単語だけで何とか通じたという話を耳にする。なぜそういうことができたのかというと、英語を話すときの「間違ったらどうしよう」という恥じらいや不安のようなものが極端に少ないからではないだろうか。確かに英語を話し、相手に通じさせなければならぬというプレッシャーはあるだろうが、何とか自分のことを伝えようとする気持ちが先に立って、それどころではないはずだ。この「何とか自分のことを伝えようとする気持ち」がコミュニケーション活動には非常に大切なことである。「間違っただけいい、伝えたい」という気持ちをいかに生徒に持たせるか、これが授業のポイントになるのである。これはコミュニケーション活動の中の「話し手」として、持っていなければならないものである。

コミュニケーションを図ろうとする態度を育てようとするときにつき当たるもうひとつの壁は、相手の話を聞こうとする態度である。相互に理解し合うためには、相手の言っていることを理解できなければならない。しかし、話している言語だけを理解するのではなく、その言語が発せられる背景や風土といった文化的なものを理解しなければ、本当の相互理解などあり得ないのではないだろうか。日本人同士であっても、その土地柄によって使う日本語もその言語の背景にあるものによって、ずいぶん違ってくるものである。さらにその違いを理解するのは、思ったよりも難しいということがよくある。日本の中において、ずいぶんあるその違いを外国に対してどう向ければよいのだろうか。私たちが外国人と接するとき、その風貌や話す言語に圧倒されてしまって、自分とは違うものという目でしか見ることができない場合が多いのではないだろうか。そこでは「興味・関心」は喚起されるものの、もう一步進んだ「理解」にまでは到達しにくい。これは知識を持っているか持っていないの問題ではなく、理解しようとするかしないかという問題である。コミュニケーション活動の中の「聞き手」の立場において、この「理解しよう」とする意識は非常に大切なことになってくるのである。

コミュニケーション活動においては、「自分のことを伝えよう」とする話し手の立場と「相手のことを理解しよう」とする聞き手の立場がうまくかみ合っていることが望ましい。この活動の繰り返しの中で、自分とは異なる価値観や文化に対して働きかけ、違いは違いとして理解し合うという「相互理解」が成り立っていくのである。そして、そこで培われる相互理解が、国際理解を深めていく基礎・基本になっていくのではないだろうか。

### 3. AETとのTeam Teachingの授業実践

英語の授業において、AETとのTeam Teachingは画期的なものである。ネイティブスピーカーを迎えて、自分たちが習った英語を実際に使う場面が用意されるわけである。ただ残念ながら、たった1時間しかその時間が確保されないというのが現実で、その1時間をどう使うかというのが、英語教師の悩みである。いちばん理想的なのは、AETと共に日頃使っている教科書で授業ができることであるが、AETの来校が年に1~2回しかないことや、週3~4時間しか英語が確保されていない中では、なかなかそうはいかない。よって、AETとの授業はその1時間だけ特殊なものになってしまうのである。近年、AETの受け入れに関して、「テープレコーダーの代わりにしている」「生徒が金髪を欲しがって髪の毛を抜かれた」などいろいろな問題はあっても、教師の側がしっかりと準備をすれば、こんな良いチャンスはない。

資料①-1、①-2（別紙参照）は、教科書を使つての実践例である。ちょうど3年生の教科書で「道の尋ね方」が題材になっているところだったので、教科書のダイアログを参考にしてコミュニケーション活動をさせてみた。最初は自分が聞く側になって、AETの英語を聞きとってみる。今度はそれを参考に、自分がAETに道順を教えてみる。実際に模造紙に地図を書き黒板に貼って活動したが、残念ながら活発な言語活動にはならなかった。AETとの授業に備えて、事前にプリント（別紙参照①-3）を用意したのにも関わらず、日頃から声を出さない3年生は、やはり実際に英語を使う場面に慣れていない。AETがいるからといって活発に声を出すわけではなく、余計に押し黙ってしまった。しかし、話そうとする英



# Teaching Procedure

Instructors: Elizabeth Larson  
Chikako Takami  
Masae Hatano

1. Date: July. 11~15.
2. Class: The 9th grade (1, 2, 3, 5, 6, 7)
3. Text book: ONE WORLD ENGLISH COURSE3 Let's Try
4. Objectives:
  - (1) To Communicate with ALT.
  - (2) To get used to asking and showing the way.
5. Teaching Procedure

| Procedure   | Instructors   | ALT·JTE   | Students  |
|---|---|---|---|
| Greetings and introductions. (10 min.)              | <ul style="list-style-type: none"> <li>• Greet with the students.</li> <li>• Introducing ALT.</li> <li>• Greet.</li> <li>• Ask ALT to introduce herself.</li> <li>• Introduce oneself.</li> <li>(Please include anything about natures in your hometown, festivals in U. S. A. and your favorite musics.)</li> <li>• Answer the questions from the students.</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>• JTE</li> <li>• ALT</li> <li>• JTE</li> </ul>   | <ul style="list-style-type: none"> <li>• Greet with the teachers.</li> <li>• Greet.</li> <li>• Listen carefully.</li> <li>• Ask questions with interrogatives and auxiliaries.</li> </ul>   |
| • Show and practice the skit. (20 min.)             | <ul style="list-style-type: none"> <li>• Practice new words and some expressions.</li> <li>• Model practice between ALT and JTE.</li> <li>• Practice between ALT and students.</li> <li>1. Let them repeat.</li> <li>2. Explain the meanings.</li> <li>3. Role practice.</li> </ul>   | <ul style="list-style-type: none"> <li>• ALT and JTE.</li> <li>• ALT and JTE.</li> <li>• ALT</li> <li>• JTE</li> <li>• ALT</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>• Listen, repeat, and understand the usages.</li> <li>• Listening to them carefully.</li> <li>• Practice</li> <li>1. Listen and repeat.</li> <li>2. Understand.</li> <li>3. Practice.</li> </ul> |
| • Play a game with a piece of work sheet. (10 min.) | <ul style="list-style-type: none"> <li>• Show ways to ? (5 spots)</li> <li>• Find out who got to the right place.</li> <li>• Celebrate the winner.</li> </ul>   | <ul style="list-style-type: none"> <li>• ALT</li> </ul>   | <ul style="list-style-type: none"> <li>• Listen carefully and find out what's there.</li> <li>• Answer where got to.</li> </ul>   |
| • Consolidation.<br>• Saying good-bye.              | <ul style="list-style-type: none"> <li>• Say good-bye.</li> </ul>   | <ul style="list-style-type: none"> <li>• ALT and JTE.</li> </ul>  | <ul style="list-style-type: none"> <li>• Say good-bye.</li> </ul>   |

資料①-1



# 第15回北海道国際理解教育研究大会石狩大会に向け

第4回全国海外子女教育・国際理解教育研究大会北海道ブロック大会

第5回石狩管内国際理解教育研究大会

大会主題 豊かでたくましい心もち 世界に目を開く子供の育成  
～教師の意識変革と学校全体における実践の拡大を目指して～

日程

9:10 9:40 11:00 12:00 13:10 17:00 19:00

第一日目

|    |          |    |            |    |     |    |           |
|----|----------|----|------------|----|-----|----|-----------|
| 受付 | 公開<br>授業 | 移動 | 開会式<br>全体会 | 昼食 | 分科会 | 移動 | 交歓<br>交流会 |
|----|----------|----|------------|----|-----|----|-----------|

9:00 9:30 11:00 11:40

第二日目

|    |          |     |
|----|----------|-----|
| 受付 | 記念<br>講演 | 閉会式 |
|----|----------|-----|

## 授業公開のお知らせ

平成6年11月10日(木) 9:10 受付 9:40～10:30 授業公開

|     |            |             |
|-----|------------|-------------|
| 幼稚園 | 石狩町立南線幼稚園  | 総合活動        |
| 小学校 | 石狩町立若葉小学校  | 生活科・社会科・国語科 |
| 中学校 | 石狩町立花川中学校  | 社会科・音楽科・道徳  |
| 高校  | 北海道石狩南高等学校 | 英語          |

## 分科会のお知らせ

平成6年11月10日(木) 13:10～16:00 於 花川中学校

第一分科会 学校全体としての国際理解教育の推進体制の確立

- 学校経営の中にどう位置づけるか
- 全体計画や指導計画をどう作成するか
- 教師の意識変革を図る校内研修はいかにあるべきか

提言者 池田幸一(札幌八軒西小)・中村恒司(白老虎杖浜)

助言者 林 勲(道立教育研究所教育経営研究部副部長)

第二分科会 教科・科目等における国際理解教育の実践

○教科や科目の目標と内容を踏まえた授業はいかにあるべきか

○児童・生徒の理解を深め、意識化を図る授業はいかにあるべきか

小学校部会（低学年）

提言者 細川道子（石狩南線小）・伊藤 永（恵庭和光小）

助言者 村井政孝（江別江北中学校長）

（高学年）

提言者 田山 裕（旭川新町小）・神保一憲（江別江別小）

助言者 上田 充（石狩教育局義務教育指導班指導主事）

中・高部会

提言者 桜井 徹（江別中央中）・川瀬雅之（白石高）

助言者 深澤宗明（石狩教育局高等学校班指導主事）

第三分科会 道徳・特活・総合活動における国際理解教育の実践

○道徳・特活・総合活動の目標と内容をふまえた授業や活動はいかにあるべきか

○幼児・児童・生徒の意識化を図る授業や活動はいかにあるべきか

幼・小部会

提言者 森 憩（石狩幼稚園）・中村正恵（千歳千歳小）

助言者 水口清勝（石狩教育局義務教育指導班主査）

中・高部会

提言者 高松幹雄（白老東高）・草野 修（新篠津中）

助言者 諏江康夫（石狩教育局高等学校班指導主事）

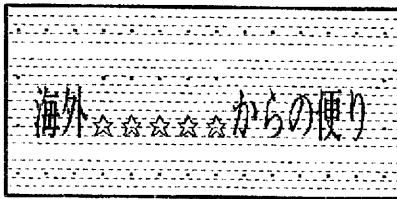
**記念講演のお知らせ**

平成6年11月11日（金） 9：00 受付 花川コミュニティセンター

9：30～11：00 講演

演題 『スポーツを通じてよりよい未来を』 ～スポーツは世界をつなぐ～

講師 オリピックミッション・IOC選手委員会委員 長崎宏子氏



海外教育施設に派遣中の  
先生方よりお便りが届いています。

平成5年度派遣 マレーシア ペナン日本人学校 森峰 智子 先生 より  
(富良野小学校在籍) 元気なお便りが届いております。

Apa Khabar? (マレー語でお元気ですか、はじめましての意)  
ご無沙汰しています。四季のない夏だけが続いているようなマレーシアで、あっという間に1年という月日が夢のように過ぎてしまいました。

3, 4月は、日本での学年末(帰国者が多いために、日本より修了式が早い上に、帰国教員のお世話がある)・学年始め(これも、日本での忙しさに加えて、新派遣教員の受け入れがある。)に、日本人学校特有のあわただしさが加わります。

……わたしの学級では、22名中、15名の転出転入がありました。その他帰国教員の手伝い、新派遣教員の受け入れ(私は車と住宅が決まるまでホテルの世話を担当しました)等、日本と違った面の多忙な日々が続きました。昨年お世話になった恩返しをと思い最善を尽くしたつもりです。

平成4年度派遣 シンガポール日本人学校長 有江 則雄 先生 より  
(豊浦小学校在籍) 元気なお便りが届いております。

世界最大の日本人学校の管理者として1800名の児童、120名の教職員の中で大活躍のご様子です。さらに第二日本人学校の建設が具体化しているとのこと。

平成5年度派遣 イラン テヘラン日本人学校 伊澤 昭宙 先生より  
(十勝 吉野小学校在籍) 元気なお便りが届いております。

平成4年度派遣 インド ボンベイ日本人学校長 山内 武道 先生より  
(札幌 北小学校在籍) 元気なお便りが届いております。

インドの貧困と日本の経済力の中での国際理解教育の難しさについてレポートされています。

平成5年度派遣 ベルリン日本人国際学校  
(登別温泉中学校在籍)

洪川 賢一先生より  
元気なお便りが届いております。

早いものでベルリン日本人国際学校も開校して1年半余りの月日がたちました。ベルリン日本人国際学校は、ベルリン市南西部にあるヴァンゼーという大きな湖に面した緑豊かな素晴らしい学習環境にあり、ドイツ赤十字社の建物を賃借した校舎で、開校当初15名の児童・生徒、5名の派遣教員、10名の現地採用講師・事務職員という極めて小さな学校でスタートしました。赴任翌日はやる気持ちを押さえながら校舎に一步足を踏み入れたものの、中には何も無いがらんど。呆氣にとられたのは私だけではなかったと思いますが、とにかくその日から手作りの学校づくりが始まりました。……開校式当日緊張した面持ちながらやる気に満ちた子供たちの表情に、心をふるわせたことが今でも鮮明に思い出されます。……教科の学習活動では、これも開校したばかりということで、教科書も教師用のものがなく、児童・生徒の物をコピーするなどして授業を進めたり……

このように昨年1年間を振り返ってみますと、どれもこれも開校したばかりの学校でしか味わえないことばかりで、苦しかったことも楽しかったことも含めて、その思い出はひとしおです。ある程度教育環境の整った中で開校2周年を迎えた今、在外教育施設としての利点を生かした教育のあり方を模索することが課題の一つであるとともに、東西統一後のドイツ経済の深刻さや、日本のバブル経済崩壊後の影響による日本企業の撤退など、児童生徒数の減少が頭の痛い悩みの種でもあります。それでも子供たちの笑顔がいろいろな苦勞をかき消してくれます。ここベルリン日本人国際学校で学んだことが子供たち一人ひとりの良き思い出として心に残ってくれば……という思いで、残りの派遣期間も踏んばっていかうと思っています。……

平成5年度派遣 ロスアンジェルス補習校 橋場 仁先生より

(帯広市立花園小学校在籍)

元気なお便りが届いております。

平成5年度派遣 ニューヨーク日本人学校ニュージャーシー分校 梶原 源基 先生より

(十勝 大樹小学校在籍)

元気なお便りが届いております。

平成5年度派遣 フロリダ コタキナバル日本人学校 加藤 達子 先生 より

(小樽 祝津小学校在籍)

元気なお便りが届いております。

秋とともに全道各地の学校で研究会、実践発表会が行われている。どの学校でも新学力観を研究の柱に置き具体化にむけての試みをしている。

また、「環境教育」を学校研究の中心に据えるなど、21世紀にむけての教育課題の解決を探る試みも多くなされて来ている。

しかし、「国際理解教育」に目をむけるとどうであろう。学校目標などには必ずといってよいほど「広く世界に目をむけ…」などと世界を意識されているのに「国際理解教育」を学校研究の中心に据えている学校は少ない。実際、私達の会員の学校においてもどれだけの学校が学校研究のなかで「国際理解教育」を取り上げているだろうか。

では、いったい実際の教育現場で「国際理解教育」が掛け声だけで終始している理由は何であろう。私達もその所をもう少し直視する必要があるような気がする。なにが実践化にむけて障害になっているのであろうか。「国際理解教育とはなんぞや」という教師側の論理の整合に力を注ぐあまり子供の学習能力の実践の場としての国際理解教育の存在をもう一度考え直すところに解決の糸口はありそうな気がするのだが。

皆さんは、どう思われるだろう。意見をぜひお聞きしたいところである。

✍ 図 書 紹 介 ✍

ワールド・スタディーズ

サイモン・フィッシャー&デイビッド・ヒックス

国際理解教育・資料情報センター編訳

めこん

〈著者紹介〉

サイモン・フィッシャー 1948年生まれ

英国バーミンガム市「対立への対処」プロジェクト責任者

デイビッド・ヒックス 1942年生まれ

英国ロンドン大学「地球の未来」プロジェクト責任者

国際理解教育の必要性が叫ばれているにもかかわらず、残念ながら言葉だけが独り歩きをし、「国際理解」の入り口論で終始している現状になにかはがゆいものを感じている人が多いことと思います。「国際理解」のもつ窓口の広さがそうさせているのかも知れません。

そんな現状に1つの方向性をしめしてくれるのがこの本です。

この本は、イギリスにおいて、教師・研究者・教育行政関係者の協力で行われた「ワールド・スタディーズ8～13歳」研究(1980～83年)の実践から生まれたものです。

ですから、「国際理解」の専門書ではなく実践の本だと言えます。この本は、まえがきにもべられているように、教師が、子供達に地球社会について、そこで起きているさま

さまざまな変化について、何を、どのように教えるべきか、また、地球上のあらゆる矛盾に満ちた問題に、教師はどうすれば公平でおもしろい授業を生み出せるか、このような疑問に答える実践的な資料だといえます。(80以上の授業案がおさめられている。)

また、この本は、カリキュラムづくりのための、特に目標と基礎概念を整理し、あたらしい骨ぐねを提唱しているのも特徴だといえます。

ですから、7章でできているこの本は、第1部カリキュラムづくり(1~3章)第2部授業案教室でできること(4~7章)の2部構成になっています。

私達が、とくに注目するのは、やはり第1部のカリキュラム作りだといえます。1章(ワールド・スタディーズと地球社会)では、ワールド・スタディーズを「多くの文化が存在し、人々が相互に依存しあう世界で、責任ある生き方をするのに不可欠な知識、姿勢、技能を身につけるための学習であり教育である。」と定義し、世界と一人一人の子供という現在の教育課題を結び付ける方向性を示しています。また、2章3章では、目標を具体的に分類し、実践への土台を整理しています。

ワールド・スタディーズが目指すものを、本書では、「学びかたをまなぶ力」「問題を解決する力」「自分の価値を自覚する力」「自分で選択できる力」と主張し、その力は「問いかけ」だともいっています。このことは、ややもすれば「国際理解」をある特殊な教育課題だと理解し、特別な授業を考えていたわたしたちに警鐘を与えると考えます。

理論と実践。この二つが見事にかみあったこの本は、「国際理解教育」の実践に多くの悩みを抱えているわたしたちに多くの示唆を与えてくれるものと思う。是非、一読あれ。

《中村 淳》

## ❖❖❖ 事務局から ❖❖❖

10月18日に大泉会長を出席をうけ事務局会議が行われた。今回の話題はなっといっても11月10日、11日の両日石狩町を会場にして実施される第15回北海道国際理解教育研究大会についての報告である。今大会の白井事務局長からは、「豊かでたくましい心もち世界に目をひらく子供の育成」を大会主題に石狩管内の会員が一致協力して大会の成功を目指して万全な準備しているという報告があり、また、今大会の中村研究部部長からは、理論と実践が結び付いた授業についての話があった。

平成9年度の全国大会の開催地は、北海道に決まったことでもあり、ぜひ会員各位の参加をえて、今大会を成功させたいものである。

名簿の訂正について 石狩支部 事務局長 遠藤優 → 白井潔

## ✍️ 編集後記 ✍️

この会報も回を重ねて30号となりました。今では、派遣教員をふくめて数多くの会員の皆さんにお届けすることができるようになりました。これも、数多くの先輩の苦勞のたまものだと編集部一同深く感謝しています。しかし、まだまだ会員の皆さんの交流の場としての使命を十分に果していると考えていけません。編集部一同心を新たし、創造的な実践をめざした広報紙を作っていきたいと考えています。これからも会員の皆さんのご協力をよろしく願います。

《斎藤吉文・中村淳》